

美しい女

椎名麟三



うつく 美しい 女 おんな

定価は帯またはカバー
に表示してあります。

新潮文庫 草 51 C

昭和四十六年九月二十五日 発行
昭和四十七年二月二十日 二刷

著 者 椎 名 麟 三

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 会社 新 潮 社

郵便 番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)二六〇一一一
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

新潮文庫

美しい女

椎名麟三著

新潮社版

2010

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

美
し
い
女

第一章

一

私は、関西の私鉄に働いている名もない労働者である。十九のとき、この私鉄へ入って以来、三十年近くつとめて、今年はもう四十七になる。いまの私の希望は、情ないことながら、この会社を停年になってやめさせられると同時に死ぬことだ。勿論、会社か停年まで、私をおいてくれるならばだ。私がこんな希望を抱くのは、会社をやめて行った同僚のほとんどが、妙なことに悲惨な生活をおくっており、なかには発狂したり、自殺したり、病死したりしたものもいるからだ。口惜しいことだが、交通労働者というものは、どこへも行って、あまり潰しが利かないらしいのである。

過去をふりかえって考えてみると、私は、いろんな人々から、いろんな風に云われながら生涯を送って来た。ある時期は、左翼的な人々から、無自覚な労働者だとか、奴隷根性をしているとか、臆病だとか、卑怯だとか、といわれた。またある時期は、右翼的な人々から、無関心だとか

曖昧だとか無責任だとかいわれた。現在では、組合の意識的な人々からは保守的だといわれている。私は、このようなレノテルについて一言も弁解しない。むしろ、我ながら情ない企てだと思ふのだが、人々から与えられたこれらのレノテルへ、人なみの熱い血を通わせ、生命の光をあたえてやりたいと思うのである。

このような私の喜劇的な位置というものは、私の誕生のときから定っていたようだった。私の父は、関西の小さな町で、小間物の行商をしていたが、そのころ胃癌で、寝たり起きたりしていた。年も六十を過ぎていて、誰ももう駄目だと思っていた。父は、村長の家の小作をしていた祖父が賭博で刑務所へ入ってから、故郷の村に居られなくなって、村の醤油づくりの家の下男をやめ、その村から鉄道の駅で五つはなれているこのK町に来たのだが、それから三十年あまり、町役場の小使をしていたかと思うと、かみじをつくりはじめ、それも駄目になると、魚屋をはしめていたが、五十過ぎてから、かみじを入れていたころの花街のわずかな得意を頼って、小間物の行商人になっていた。彼が、そのころ引張って歩いた車が、父の死後も長い間、家の裏の納屋に放り込んであった。売れなかったからである。それは黒漆を塗った、ちよつと棺に似た箱へ、自転車の車輪を二つつけ、人力車のような轆をつけたもので、どこことなく間に合せの感じのする粗雑な車だった。勿論父が自分でつくったものだ。私は、小さいとき、その車を、「葬式屋」と呼んだ。

母は、父の主人の家へ子守りに来ていたのを、父が故郷を逃げ出すとき、父にうまうまと連れ

出されたもので、そのとき数え年で十六だったという。そして母は、そのことを極めて自然な成行と考へていて、後悔もせず、その後の三十年間に、父に始終なぐられながら、七人の子を生み、四人の子をみな一年たない間に死なせていた。そして私をはらんだときは、四十六だった。

兄の敬治は、駅前の運送店につとめていたが、給料は微々たるもので、薬種屋の女中をしていゝる上の姉の千代子も、家計の足しにはならず、家の生活は、大部分母が花街の女たちの汚れものを洗ってもらつて来る金に頼つていた。母に、それほど仕事があつたのは、一に父のおかけだった。というのは、花街のおかみや女たちが、彼女らの顔馴染であつた父の、胃癌という病氣になり、だからきつぱり死へ定められてしまつた人間となつたことに同情してくれたからだつた。しかし父は、胃癌になつてから、一年半あまりも生きていたのである。だから順当ならば、彼女たちは、たとえ飽々しても、一年半あまり同情しつづけなければならぬはずだったのである。

ところが、胃癌の父が、母へ私をはらませてしまつたのだつた。父や母にとつてだけでなく、同情が売物であつた一家にとつては、悪魔が母の腹のなかへ忍び込んだような衝撃だつたことか想像される。というのは、母が、町はずれの竹藪のなかに住んでいる巫女のもとへ行つたという事実からも察せられよう。そのとき巫女は、父の先祖に人を殺した者がいて、その霊かたたっているのだから、その霊を祭るように、というけしからぬ託宣をした。その託宣のおかげで、家の小さな仏壇のなかに、氏名不詳と書いた白木の位牌がまつられた。だが、私は、母の腹のなかで、いささか残酷であるが、順調に大きくなつて行つたのである。やがて母は、薬種屋の女中をして

いた私の姉を通じてなんてんの根を下に入れた。その地方では、子供を間引くために、墮胎薬としてなんてんの根を煎用するという、かくれた風習のあることを母に教えるものがあつたからである。母は、危険を覚悟で、なんてんの根をのみつづけた。だが、私は、そのような母の悲壮な医学的処置や父や兄弟たちの狼狽には、全く無関心だった。私は、父の死ぬ一月前に、自然の法則にしたがつて、母の腹から排出されたのである。私の産声は、私の一家に、あわれな驚嘆を与えた。父は、弱り果てた身体を、壁に凭らせながら、情ない声で訴えるように姉の千代子へこういった。

「生れたんや、 生れたんや、 生れたんや」

私は、父母や兄弟が、どんなあわれな驚嘆を示しながら、産婆の手のなかにある私を見たか、私は私でその彼等に対してどんなに無邪気に振舞ったかを想像するとき、ユーモアを感じずにはいられないのだが、私が自分の誕生にこのようにこだわるのは、宿命の原型のようなものを、その自分に感ぜざるを得ないからである。

父の死後、私は、下の姉の数枝の手で育てられた。数枝は、そのころ小学校を出たばかりであつたから、私が彼女にとってどんな重い桎梏であつたか、察することか出来る。だが、また私は、普通の赤ん坊が泣くように泣き、笑うように笑つただけだ、ということも確実である。家族の者たちが、私にどんな意味をあたえていたにせよ、私は実に無邪気ただけだと断言してはばからない。

私が、小学校へ行くところは、家の生活はかなり安定していた。兄の敬治は、依然として運送店へ住込みのままであったが、トラノクの運転手となり、あの大正初期の好景気に乗って、収入も多く、その上、炭や米や肥料などの荷抜きをして売りどばすという、はなはだ香しからぬ余祿も多かった。敬治が、突然トラノクをとばして来て、家の前で急停車させると、商家風に出来ている家の表のガラス戸をがらりとあけるのだ。それから助手に向って叫ぶ。

「何をぼやぼやしてけつかるんや、はよ下ろせ！」

家の土間へ、炭俵が、三俵も五俵も勢よく投げ込まれる。母や私たち三人の姉弟は、その兄へ彼が英雄であるかのように協力する。彼はときには、破れて太い指の突き出ている汚れた軍手のまま、ポケントから銀貨をつかみ出して、

「ほら、小づかいや」

と畳の上へ投げ出すと、さっと引上げて行くのである。兄は、あらゆることに要領のいい男だった。そのころもう三十だったが、女も数人あり、彼女らに対しても要領よく振舞っているようだった。だが、続いて起った大正のバニノクが、兄の要領のよさにとめを刺した。彼の長い間つとめていた運送店が潰れ、しばらく失業してから、やっと日市の運送店へ口を見つけて行ったが、その店は窮屈で待遇もひどいものだった。彼は、そこで荒物問屋のひとり娘へ、うぶな少年のような恋をして失恋した。そのころの彼のやつれようは、滑稽なほどであって、母や姉から五十銭の小づかいをせひりとるのに、見えすいた嘘をつく卑屈な男になっていた。

上の姉は、大工と結婚して、一家の支柱は、下の姉の数枝に移っていた。数枝は、カフェーにいつもはしめていたからである。このような生活のなかにあって、私の心に残るのは、母の姿だ。母は働くことしか知らない女だった。彼女は、全く「こまねずみ」という仇名あだなをつけたいほどくるくる身体を動かした。彼女は、全く絶望というものから無縁だった。私は、彼女の泣くのを一度も見ただけではない。それは彼女の精神に由来するのではなく、まことに残念ながら、それは彼女の無智のせいだった。彼女はよく自慢そうに兄のことを語って、一つ覚えのせりふのよう

に、
「うちの息子、トランクに乗ってまんねん」

と繰り返すのだ。幾度トランクとトラノクとのちがいを説明しても、にこにこしながら聞いていただけで無駄だった。姉たちは、このような母を相談相手にならないときめて、私の身の振り方を決めるときも、母を除外した。だが、母にとってはそんなことは、少しも苦痛ではなかったのである。彼女は、小柄な女で、六十になっても小学生のように手を大きく振って、駈けるように歩いた。焼酎しょうちゅうが好きで、飲むと愚にもつかぬことを云って、臍へししそうに笑った。

私は、このような母に、そして母のこのような無智に限りない郷愁を感じる。私は、いま、もう五十に手のとどく中年男になり、頭にも白毛しらげがまじりはじめている。だが、この間いやな事件があって、それを忘れるために、釣り仲間へ加って海釣りに行ったのだが、帰りに酒にまかせて愚所へ泊った。しかし私の心からは、死の思いが消えず、うとうとしながら思わずこう叫んでい

た。

「おかあちゃんー」

傍の女は、はげしい勢で反射的に身を起すと、強い嫌悪をこめながら吐き出した。

「いややわ、このひとは！ 何もわてと寝てて、おくさんのこと思い出さんかてええやおまへんかー」

だが、私には子供はなく、だから妻を「おかあちゃん」と呼んだことはないのだ。母は、私がこの私鉄に入る前年、六十四でなくなっていて、それからもう三十年たっているのだが、いまだに、困ったときや不安で眠れないときにとび出して来るのが、恥しいことだが、この情ない「おかあちゃんー」なのである。

私は、いま、運輸課の切符の係だが、私の机の下には、焼酎の一瓶びんがいつもおいてある。私は仕事中でも、お茶のかわりにその焼酎をのむのだ。係長も運輸課長も、私にはさじを投げた形で、私の焼酎は黙認されている。だが、私は、この黙認にあまえているのではない。仕方のない男として人々から見すてられているのが快いのだ。たが、日本酒でもなくウイスキーでもなく、焼酎であることは、母の焼酎につながっている気がして、ときには、自分でも気の毒になるほど、耐えがたい思いがするのである。

私は、全く不名誉な話だが、一度も本当の自分であったことはない。私は、高等小学を卒業後、そのころ市になったK町の青年学校へ通い、それからこの私鉄に車掌として入ったのだが、車掌として勤務していても、何か自分ではないことをしているという気がするのだった。ことに駅名称呼などで、車内で声高らかに次の駅名を叫んでいるとき、自分が鶏でいまときをつくっているのだ、というような気がするのだった。そしてこの私の精神的な特徴は、そのような意識が私にやって来たとき、一度は神妙にがっかりするのだが、すぐにがっかりしている自分が、ひどく面白く感じられて来るといふ奇妙なものだった。

だから私は、思いをつくし意をつくして至極真面目に勤務した。そうする方が面白かったからだ。佐鳥というひとくやせた古参の運転手は、気分屋で、あるときは脱線しないかとひやひやするほど車をとばしていたかと思うと、ふいに牛の歩みよりのろのろ走らせるのだった。私が、どうしたのかと思って運転台に行くと、佐鳥は神妙な顔で私にいうのだった。

「どうも故障らしいんや」

勿論、故障を起しているのは、車ではなく、彼の気分であることはいうまでもない。車掌には、このような運転手は鬼門である。ポールをスタンドさせられたり、突拍子もない早い引き出しをやられて、乗ろうとしてステップに足をかけている客をひっくりかえしそうになるからだ。しか

しそのような彼に、誰も文句が云えないのだ。というのは、彼は、二十数年も運転手をやっている古参のなかの古参のひとりだからだ。ある日、この佐鳥と乗組んだとき、ふいに車掌台へ三点信号が来た。どんな用事かと思つて、満員の人々をかきわけてやっと運転台へ辿りつくと、彼は、何か納得の行かない顔付で、私にいうのだった。

「お前、車掌がそんなに面白いのか？」

「面白いというわけやないんやけど」

「お前と乗組むと、ほんまに何か、いらいらさせられるんや」それから彼は、腹立たしげにどなつた。

「ええか、とばすぞ！　ポールをちゃんとにぎつとれ！」

だが、私は、佐鳥には迷惑だったろうが、このような彼が好きだったのである。勿論、佐鳥だけでなく、一緒に働いている仲間で、きらいな者はいなかった。だが、仲間の方では、残念ながらみんなこのような私に対して好意をもってくれていた、ということは出来なかった。軽蔑し去つていくという顔付をしている者もいたし、詰所で人々の間に、私のことが話題になるときも、人々の表情に多少私に対して呆れているという感情のいりまじっているのを認めることが出来た。だが、私は、人々の思惑如何にかかわらず、あわれにもせい一杯車掌という仕事に精励せずにはおられなかったのである。せい一杯だ。このようにせい一杯の仕事を長くつづけることは、とんなに困難なことか察してもらいたい。しかし私は、多少のおかしさを感じながらも、このよう

な自分を桑々とつづけることが出来たのである。そして私にそう出来たのは、勤務が終って下宿への帰りに飲む焼酎しょうちゆうのおかげだということが出来よう。

その店は、乗務員のつけの利く貧弱な店で、ラム不から餅菓子もちかしまでおいてあるだけでなく、簡単な御飯物も出来た。私は、そこで焼酎を飲んだのだが、その飲み方も、度をすごしたことの無い至極真面目なものだった。だが、その焼酎を飲んでいるとき、私の心に痛切にうかんで来るのは、美しい女への思いだった。このようなおかしな自分から抜い出してくれる美しい女だった。しかし私は、私の美しい女が、どんな顔をしどんな姿をしているのか、さっぱりわからなかったのである。たまた、美しい女への思いがうかぶと、私の心のなかに、何か眩しい光と力にみだされることだけは事実だった。いわば美しい女というのは、まるで眩しい光と力そのもののような工合だったのである。

繰返していうが、私は、まことに単純な人間なのである。世の夢想家といわれるような高尚な人種ではなく、ひどく現実的な男であり、そしてひどく現実的な労働者なのである。私は切符の精算のとき、切符とあわせて、売り上げの現金があまったり足らなかつたりするようなことは殆んどないのだ。また、あの車内に規則としてかかげることになっている運転手と車掌の名札は、車掌の責任なのだが、車の交代のとき、もって降りるのを忘れて、あわてて次の駅へ電話をかけ、上りの電車で送り返してもらおうという、車掌のよくやるへまを仕出かしたこともない。私は、万事をきちんとしていることが好きで、また万事をきちんとすることが出来るのだ。だが、このような

現実的な男が、滑稽にも、眩しい光と力としてしか思いうかばない美しい女を、痛切に欲しがっていたのである。そのとき、あの倉林きみという私娼が、思いうかんでいたのではない。第一、あの女は、美しい女の意味するものと、正反對の女であつたからである。

私のおかしな真面目さは、仲間から多少輕蔑され呆れられてもいたが、私と仲間との間に決定的な溝をつくるものではなかつた。むしろ私は、概して仲間とはうまく行つていたと断言してはばからない。仲間の間には、仕事上のつまらないことから、ひどく感情的になり、たがいに生れない前から仇敵であつたように憎み合っているものもいた。だが、私に対しては、どんな行きちがいが起つても、ほんとうに腹を立てる者もほんとうに憎むものもいなかったからだ。私のおかしさに腹を立てている者かいることはいたが、同じ私のおかしさが、彼の腹立ちをゆるめているようだった。同期生の原田に恋人がいた。染物屋の娘なのに色が白いと評判だった。その娘が、ある日ひとりで私の車に乗つて来たのである。私は、彼女が原田の恋人であるということに彼女に十分好意をもっていた。だが、私は彼女へ切符を請求したのである。残念ながら笑いながらだ。彼女は、最初私の笑いに応じて笑っていた。だが私が彼女の前にいつまでも立ちつづけているので、彼女は次第に困つた顔になつて行つた。やがていらだたしい暗い顔になつたと思うと帯の間から手製の小さな財布を出すと、なかから十銭白銅を出した。私は、急に神妙な氣持になつて、一区の切符へパンチを入れた。私は、車掌台に帰りながら、どうして彼女は、原田の恋人だからただでのせて、といわなかつたのだろう、とむつとした顔をしている彼女を想像して、あわれに